



田中舘愛橘 (1856-1952)

Tanaka Hakuseki

写真：文化勲章受章時(昭和19年4月29日) 題字：氏名サインとも田中舘愛橘自署より

田中舘愛橘会 会報59号

(たなかだてあいきつ) 岩手県二戸市出身の物理学者。日本の理科学諸学の基礎を築く。文化勲章。文化人切手。東大教授。貴族院議員。地球物理学の研究、度量衡法の確立、光学・電磁気学の単位の研究、航空学・気象学の普及などに功績。日本式ローマ字論者。

田中舘愛橘とグラスゴー留学時代

1 グラスゴーへ

愛橘が英国スコットランドのグラスゴー大学に留学したのは明治21年から22年にかけての約2年間(1888-90)32歳の時である。その後引き続き1年間ドイツのベルリン大へ留学し1891年7月に帰国している。1880年代後半のこの時期は明治政府にとって「廃藩置県」(明治4年)「西南の役」(明治10年)を終え「自由民権運動」(明治10年代)と続きながら徳川以来の負の遺産を抱え、維新以来苦勞してきたインフレを大蔵卿松方正義による強引なデフレ政策でなんとか沈静化に成功し、やっと前向きの近代的成長に入りかけた時期と重なる。その成長達成のためには近代的科学思想・技術の産業への適用や産業構造の変化と生産性の向上、国際的交流が必要で、これらはまさに欧米の産業革命の成果でもあり、愛橘たち留学生派遣の急務でもあった。明治政府は大化の改新の遣唐使にならない国づくりという期待を込めて留学生を積極的に派遣してきたがその背後には高給の外国人招聘教師を一刻でも早く留学生に代えたいという切実な財政事情もあった。

愛橘は明治21年(1888)1月15日横浜港からフランス船サンド号で出発し2ヶ月近くかけて3月9日フランスのマルセイユ港に上陸した。この時が初めてのヨーロッパ大陸への上陸であった。当時ヨーロッパへ行く日本の客船は無くフランス国船で行かざるを得なかったことを「しみじみその情けなさを感じた」と後に語っている。また翌年夏休みのパリの博覧会で見た派手な高いエッフェル塔を見た時やエジンバラで出来立てのフォース湾の実用的な長い鉄橋を渡った時も「こんな物は時と金さえあればどこの国でも作れる」と悔しがっている。

しかし18世紀の後半にイングランド・南スコットランドで始まった産業革命はすぐにフランス、ドイツ、アメリカ等の欧米に伝播し19世紀半ばには各国の主要都市の人口が急増し、経済的繁栄をきわめていた。特にナポレオン3世時代パリは都市計画が進められ現代のような美しい街並みが形成されていて、1853年には初の百貨店(ボン・マルシェ)も誕生した。衣料品を大型店舗で大量陳列し定価で安く販売する、この革新的商法は財産はないが小金を持つ労働者の買物に都合がよく人気が出た。1867年には渋沢栄一も徳川慶喜の弟昭武の一行



上智大学名誉教授

田中利見

元エジンバラ大学名誉校友

(田中舘愛橘会理事)

1945年二戸市福岡生まれ

の一員としてパリに滞在し百貨店や万国博覧会を閲覧し資本主義の基本的仕組みを学んでいる。百貨店はその後米国ニューヨークのメーシー（1858）、英国ロンドンのハロッズ（1880）と創業され、1910年代には黄金期を迎え欧米の都市文化の花形的存在になった。因みに日本最初の百貨店は明治38年（1905）創立の日本橋「三越呉服店」で、愛橘の帰国から15年後である。当時少なくとも10年の産業文化的遅れを感じたと思う。

留学中に愛橘はエジンバラ、ロンドン、パリ、ベルリンと様々な都市を視察し、学者と交流したことはその後の世界的に信頼される科学者として、また常識を兼ね備えた教養人としての成熟につながったと思う。もちろんそれは留学以前における生来の性格や幼年時代における家庭の躰、藩校の教育、青年時代の東京での学生生活、そして東大時代の山川健次郎学長やメンデンホール教授、ユーイング教授との出会いなどを通して個人的な鍛錬を重ね獲得した信用と地位の上に形成された人格であると思う。

以後愛橘の自叙伝「時は移る」1988題：TOKI WA UTURU 1948を参考にグラスゴー留学に彼が感じた時代の精神と環境について考察してみよう。

幕末・明治期の海外渡航者は約4,200名と推定されている。彼らの中にはヨーロッパの近代科学技術の導入に大きな役割を果たしただけでなく日本国家の歴史そのものを大きく左右した人たちもいる。例えば幕末1863年長崎において長州藩士5人が艦船の販売などで活躍していたスコットランドのアバディーン出身の貿易商グラバーの助けを借りてロンドンに密航した。その中に後に総理大臣になる伊藤博文と井上馨がいたが二人はせっかくロンドンに着いたのに、ほどなく知らせを受けて長州藩の無謀な英国船攻撃を止めるため急遽帰国した。残った仲間のひとり山尾庸三はグラスゴー大学で造船学を学び、帰国後伊藤とともに工部大学校（東京大学の前身）の設立を立案し、その初代校長は山尾の友人でグラスゴー出身のダイアーになった。これはその後東大に招聘されたエジンバラ大出身ユーイングそしてその先生のウィリアム・タムソン（ケルビン卿）等スコットランド人脈つまり愛橘の恩師や留学につながってくる。

ところで、マルセイユは私も何回となく滞在したがフランス最大の港で東洋への長旅の出口でもある。港近くの高台にはノートルダム教会がそびえ立ち、はるか地中海を見下ろしている。今でも港には小さな漁船がその朝採ったばかりの魚を戸板に並べて集まってきた市民に売っている。正面の高台のセントラル駅から鉄道で西へ行くとスペインへ、東へ行けばイタリアまで行くこともできる。だが愛橘は鉄道で北上しリヨン経由で脇目も振らずパリに直行した。多分、南部藩の藩校作人館の同期生原敬と久しぶりに早く会いたいと思ったからであろう。当時、原は外務卿井上馨の世話でパリの代理公使になっていた。彼らは酒と言うからワインだろうで牛鍋を食べながら夜遅くまで語り合ったそう。愛橘によれば議論は原のフランス流理論政治と同伴した都築某のドイツ流現実主義の見解の違いだったそう。あまり深掘りはしないが司馬遼太郎によれば当時の日本の知識人の代表的な思想の流れはドイツ流に傾きかけていた。明治20年末の文部省海外留学生の数は独12英3米3仏1の計19名でドイツが大半を占めている。（渡辺實「近代日本海外留学史」）

明治政府は幕末において徳川幕府と親しかったフランスと離れ、当初は薩長と親しかった英国の海軍、鉄道、郵便などの制度を取り入れていたが明治10年ごろから急激に主に陸軍や医学、哲学などを中心にドイツ流に傾斜していった。愛橘自身も当初から留学先をグラスゴー大学からドイツのベルリン大学へ移す予定になっていた。愛橘の後輩であった新渡戸稲造も

すでに1884年に東大から農業経済の研究にドイツへ3年留学している。

J. ガルブレスによれば当時のヨーロッパには英国の「個人のために国家がある」という自由主義路線とドイツの「国家のために個人がある」という全体主義路線があったそうだ。後進国でありながら躍進しつつあるドイツに親近感を感じたのかついには伊藤博文らによって草案されたドイツ流の明治憲法（1891）が制定された。この政府の転換はその後の歴史の岐路になった。結果論かもしれないがやがて日本は陸軍中心とした「富国強兵」路線に一層傾斜して日独伊三国同盟そして第2次世界大戦の悲劇につながる。

話を戻すが愛橘はロンドンを経由しダンディーで東大時代の恩師であったユーイングと会い、数日の滞在後、彼の先生でもあるタムソン教授と会いに一緒にグラスゴーに到着したのは3月22日であった。グラスゴーセントラル駅は産業革命の象徴とも言えるガラスと鉄骨をふんだんに使ったドーム型の明るい巨大な駅舎である。駅を出るとすぐに薄暗いブキャナン通りに突き当たる。グラスゴーの冬は小雨交じりで暗く冷たく湿っぽい。現地の人間でさえ鬱病になるくらい嫌な季節である。幸い愛橘の到着したこの頃からイースターという春の女神に由来する復活祭に入り、大学や学校は数週間の休暇に入る。余裕をもって4月半ば頃から始まる新学期を迎えたことであろう。

2 グラスゴー大学と産業革命

ヨーロッパの都市と大学はもともと教会から発達している。グラスゴーも6世紀に建てられたマンゴー大聖堂を中心に住民が集まり市場、市役所、商工会議所（ギルドハウス）ができ、1451年に大学が大聖堂の背後の小高い丘にスコットランドで二番に創立された。最も古い歴史を持つのは1412年創立のセントアンドリュース大学で、三番目は1583年創立のエジンバラ大学である。因みにヨーロッパで一番古い大学は12世紀半ばに神聖ローマ帝国のボローニャ大学で、次が同世紀半ばのパリ（ソルボンヌ）大学である。

愛橘より30年後の大正7年（1918）ウィスキー研究のためグラスゴー大学へ留学したニッカの創業者竹鶴政孝はエジンバラは京都のようだがグラスゴーは神戸みたいで港には大きな造船所が集まっている工業貿易都市であると記している。日露海戦で活躍した戦艦三笠もここで作られている。竹鶴によれば当時のエジンバラ大学は医学、文学、宗教などが有名である。彼は目指すウィスキー研究が進んでいるグラスゴー大学に入学した。研究は実践的でハイランド地方のスペイ川沿いにあるグレンリベット蒸留所で実習し、文献は充実した図書館で研究し、4年後の大正10年（1921）に帰国し本格的なウィスキー作りに着手した。それ以前は輸入品を除けば日本には模倣の調剤ウィスキーしかなかったのである。

18世紀の後半から19世紀にかけての産業革命期にグラスゴー大学の二人の学者が活躍した。一人は科学者のジェームス・ワットで蒸気機関の開発（1769）で有名である。ワットの開発した蒸気機関によるタービンは労働者や物資を集めやすい平地に工場を作ることを可能にした。これまでの紡績工場は水力を利用するために山奥の川沿いに建てられていたが1839年にはグラスゴー周辺には紡績工場が約100箇所あり英国全体の半分を占めている。

かつてアイルランドやスコットランドのハイランド地方からアメリカへ移民していたが大半の労働力がグラスゴー周辺に定着してきた。人口は1750年代に1万7千人でしかなかったが19世紀の半ばには40万人、愛橘の留学した後半には50万人に達し、20世紀初頭には70万人を超え、グラスゴーはロンドンに次ぐ2位の工業都市になった。

もう一人はグラスゴー大学道德哲学教授のアダム・スミスである。彼は最初の経済学の書と言われる「諸国民の富の性質・原因の研究」(以下「富国論」)を1776年に出版し、経済発展の3つの基本的原理を明示した。

第一は、経済動機として自己利益の存在である。スミスの有名な一節「われわれが夕食を得ることができるのは肉屋、魚屋、パン屋の慈悲によるのではなく彼らが自分の利益を尊重することによる。われわれは彼らの人間性に訴えるのではなく彼らの自愛心に訴えるのだ」人々が働くのは他人への奉仕のためではなく自己利益の追求競争のためである。市場交換という「見えざる手」によってお互いに必要なものが手に入り公共の利益につながるという考え方である。今では当たり前と思われるこの考え方は当時には革新的であり理解しがたいものであった。中世の昔からキリスト教において金儲けや蓄財は悪徳のように扱われてきていた。しかしこのような利己心がやがて社会の雇用や所得そして革新的技術さえも生み出す活力にもなった。その結果1880年代当時の富裕階級特に米国においては英国の社会学者H. スペンサーの社会ダーウィニズムが人気を得た。それはダーウィンの進化論の見解を単純に社会に当てはめたもので「金持ちは社会淘汰から生じる適者生存」であるからその存在に干渉すべきでないという実に金持ちに都合の良い説である。

第二は価格形成と所得分配の問題である。彼によると価格(価値)はそれと交換するために必要な労働量と等しいという「労働価値説」を提唱した。価格を構成する土地、資本、労働の要素に対して所得が分配されるとした。この考え方は経済学の中心問題としてその後多くの学者によって多面的に検討された。中でも産業革命が生み出したもう一人の偉大な経済学者カール・マルクスの資本家による「搾取された労働価値説」のような共産主義的イデオロギーは歴史的にも今日においても多くの地域に多大な影響を与えている。

第三は、分業と専門化に基づく国家繁栄のための経済政策の提言である。スミスはグラスゴーの小さなピン製造の会社においてまず針金を引き延ばし次にそれを真っ直ぐにしてからカットしさらに尖った先端を作り、最後に頭を作るという工程が別々の作業人によって次々と完成されて行くのを見て、分業と専門化が一人でピンを作る量の何倍もの作業効率を良くしていることを発見した。彼はさらに分業の程度すなわち生産性は交換つまり市場の規模が大きくなればなるほど促進されること、従って外国との貿易で市場が拡大すれば国家も繁栄するとも主張した。しかしスミスは愛橘が留学中に見たような資本家が金儲けに励み植民地から安い羊毛が輸入され多数の労働者が安い賃金で大規模紡績工場において朝から晩まで働き織布が大量生産されるような経済を見ることなく1790年エジンバラで亡くなり埋葬された。

3 留学時代と思想形成

幕末から明治にかけてスコットランドに留学した若者の間で「右手に富国論、左手にウィスキー」という言葉が流行したそうである。(余談:私も大学のゼミでは現代経済学の基礎であるJ.M ケインズの『雇用・利子・貨幣の一般理論』を右手にサントリーレッドを左手の毎晩であった。)

彼等はスミスの自由主義的政治経済政策の影響を受けただけでなくその後の日本の文化や流行にも多大な影響を残した。愛橘は当然本業である科学技術については東大時代にメンデンホール教授やユーイング教授にグラスゴー大学留学時代にはタムソン教授(後のケルビン

卿)から物理学及び関連科学諸分野、科学的研究方法などを徹底的に学習したであろう。留学二年目には大学の物理学会副会長に推薦されているくらいである。

さらに彼の関心は本業に留まらず色々な分野に広がっている。例えばまず宗教である。愛橘は留学中の日曜日には様々な宗派の教会に行くことが多かったと回想している。イングランドは英国聖公会(立教大の宗派)が主流であるのに対してスコットランドにはカソリックの宗派が多い。幼年時代に漢学を学んできた当時の若者たちにとって洋学を学ぶということはキリスト教と直面し、内面的にしる外面的にしる折り合いをつけなければならないことは第一の問題であったであろう。明治の初期には全国各地にキリスト教宣教師による教会や学校が創立され、中には新島襄(同志社大創立者)や札幌農学校の内村鑑三のように改宗した者もいた。愛橘の場合東京にいる時から外人やキリスト教とある程度接触していたし、幼い頃からの神社・仏閣での年中行事や論語等の儒教的学习を重ねているのでそう簡単にはキリスト教の教えには感染しなかった。しかも尊敬するキュリー夫人のような西洋の科学者は本当は無神論者だったと語っているようにいわばキリスト教に対して免疫が形成されていたであろう。当時はグラスゴーには真面目な宗教家、市民が多かったそうであるが1世紀も経て私が滞在したエジンバラ大学のほとんどの学生は日曜日に教会に行かなかった。だが日曜日に酒の販売は禁止されているので週末に買って置かなければ酒好きには大変なことになる。今でもキリスト教の影響は国家や国民の隅々にまで残っている。(余談:日曜の朝学生寮のラウンジでビールを飲んでいると真面目な博士候補生が教会に行く前に「お前はなぜ教会に行かないのか、それで幸福になれるのか」と尋ねるので「俺は大半の日本人サラリーマン同様にワークホリック(仕事中毒)でアルコホリック(酒中毒)なのだ」と、冗談を言い「日本人はエコロジー(自然生態系)を神々と考え、固有の文化を残してきた祖先を崇拜し、武士道を美德としている」と反論した。)

愛橘も当たらず遠からずそう思っていたからキリスト教は「なんとなく腑に落ちなかった」のであろう。彼は宗教と科学の関係についても結局は適当に付き合えば良いと折り合いをつけた。

さて少々横道にそれたが、愛橘は英国滞在中に特に気づいたこととして経済と道德との関係を断片的に挙げている。その例として彼がスコットランドで鉄道に乗った時、旅客が手荷物のチッキがなくても各々勝手に持ち帰れること、さらに切符を買わなくてもあるいは落としても自己申告で乗り降りできることの効率性を指摘している。今でも英国では改札口がなく切符を買わなくても乗車できるし降車もできる。しかしほとんど必ず車掌が次の停車駅までに「チケット、プリーズ」と叫んで検札に来るし、しかもその場合の料金は割高になっているので地元の人は乗車前に切符売り場で「シングル(片道)！ワン(1枚)」とか「リターン(往復)ツウ(2枚)」と言って買って置く人が多い。事前に往復で買った方が得するようにできているし改札口の車掌も要らなくなるので人件費が削減できる。英国の料金制度も時々合理的と思うことがある。例えばパブなどではまずビールやワインの代金を先に払って購入する。途中で追加するときもその都度払う仕組みである。その方が客は帰りたい時に清算を気にせず帰れるし店も飲み逃げを防げる。日本では客がタダ乗りをしないか不正をしないか不平等にならないか公平かどうか、いちいち調査や予防するので政府の行政手続きが煩雑になり不便で不効率になってしまう。英国では客の性善説を前提に経済が動くので効率が良いと愛橘が気づいたようである。

ドイツの社会学者マックス・ウェーバー(1864-1920)はヨーロッパの資本主義発展をプロテスタンティズムの倫理に求めた。現在アフリカ諸国よりアジア諸国の方が高い経済発展を示している。これは正直、儉約、勤勉を徳とする儒教的倫理と関係があると思う。日本の近代資本主義の父と言われる渋沢栄一は「右手にそろばん左手に論語」と語っている(余談:政治も経済も国民の道徳レベル以上に立派にはならないと思う)

愛橘はまた富とは金や土地等の資本でもない。着物や食品のような物的財貨でもない、権力や名誉のようなものでもない、心の問題であり、「本当の富は自分の心を満足させるだけでなく多くの人の心を満足させる価値」すなわち「文化」であると指摘する。「文化は何も文藝や美術にかぎらない、全ての社会の職業にわたって何でも人間に満足を与えるものはそれである」「事業家がある企てをして。良い仕事を興し、自分も社会もその利益に満足するも全く同じことである」「我利我利亡者もいるがそれぞれの吟味で化けの皮がはがされ、人間は全体として善に進む証拠である」とも言う。現代の国際政治では文化を国家のソフトパワーであるとして重視している。実に、これは彼の慧眼である。

次に彼は、専売権(今でいう特許も含む)について共同の利益を阻害するのではないかと疑問を呈している。しかし簡単に模倣されればせっかくの工夫や努力も儲からなくなると否定もしないがニュートンやキューリーのような科学者は金儲けをしたくて発明発見をしているわけではないのに、さして世に貢献してもいないような些細な工夫に専売権が与えられて金儲けに繋がるのはおかしいと主張する。今の所この問題は特許の期限に制限を設けることで調整しているが今日の新型コロナ問題でも発明した製薬会社が独占的利益を得ているのに対しWHOは後進国にワクチンを無料配布すべきだと主張している。

さらに愛橘は英国で発生した鉄道ストライキについても労働者に同情を感じるところもあるが野蛮な行為であって資本家と労働者が冷静に話し合うべきだと指摘している。また、彼はストライキよりも過激な労働者による革命については百姓一揆にたとえ「富の違いが高まりすぎないように社会組織を仕組みなければならない」と警告するとともに「その主義(平等)になれば人間は骨折って財産を作るという意気込みが緩んで一体に墮落しないだろうか?と心配するものがある。…だが人間に前に進もうとする本能の種がある以上はそんな心配は無用である」と楽観的である。達観的と言うべきか。

確かに19世紀になると貧富の差を縮小しようとするロバート・オーエンとその義父のようなユートピア社会主義的人道主義の資本家も現れてくる。彼はグラスゴーのクライド川上流にあるニューラナークの紡績工場において労働条件の改善、保険制度、労働者の子弟のための学校さらに最初の協同組合の設立など経営の近代化を推し進めた。しかし共同経営者との仲間割れで失敗した。だがその精神は世界にも広がり各国で協同組合が結成され、その影響は我が国でも早く愛橘の留学前の明治12年(1879)キリスト教的社会主義者賀川豊彦等による生活協同組合運動にまでつながってくる。もちろん愛橘は産業革命とともにマルクスが指摘した階級的対立がその後1843年「共産党宣言」、1867年「資本論第1巻」発行と続き各国で労働者によるストライキを多発させ、社会主義者や共産主義者による過激な革命や紛争さえも生じてきているのを承知しているはずである。

現在でも英国では保守党と労働党があるように労働者階級がある。今でもスコットランドの地方のパブには一般の市民用と労働者用の入口がありバーも別々になっていることが多い。英国では階級が比較的固定的である。日本では歴史的に貴・士・農・工・商間の階級という

よりも族間移動がそれなりになされてきた。貴族から武士の社会になり江戸時代末には武士の肩書が売買されるようになった。今や士族も平民もない。

さて、愛橘の政治経済観は総じて言えば自由で民主的で誰にでも開かれている。人間の本性は善であるから、「進化論的自然淘汰」を経て、個人の自由な富の追求が共同の利益につながるというものである。他方スミスは「私利が経済的動機づけの中心となる。私利を個人的競争的に追求することから最大の公共的利益が生まれる」と考えた。いずれにせよ経済の動機が個人の善意なのか我利なのかあるいは両者なのかはわからない。二人の考え方は社会的評価の過程を経て長期的に公共の利益に結びつくという点では似ている。違いはその過程を愛橘は科学者らしく社会的自然淘汰に、スミスは自由競争に求めている点にある。また愛橘は社会的ダウニズムの放任主義には批判的で貧富の極端な格差は是正したほうが良いと説く。それでも長期的には善に導かれ良い結果になると人間を信用している。(余談：私の研究してきたマーケティング理論では企業の利益は取引を通して消費者満足を提供することによって獲得できるという考え方「消費者志向」を基本原理としている。その点では愛橘の主張に近いような気もする。)

何れにせよ現代の経済政策では市場において独占を排除し、自由で公正な競争の実現を目標にしている。しかし百戦錬磨のプロ企業とアマチュア消費者間の取引において果たして愛橘の性善説とスミスの自由競争論だけで適正かつ有効な社会的評価を担保できるのかは疑わしい。ビジネス倫理教育、消費者教育、消費者情報の提供、マスコミ・NPOのような第三者的批判勢力さらに社会制裁を課す法律も必要になってくるであろう。

4 グラスゴー大学留学とその足跡の旅

愛橘のグラスゴー大学留学から110年後平成9年(1999)に二戸法人会の有志約20名(団長丹野幸男)が同大学へ訪問した。この年のスコットランド訪問には特別の思いがある。それは今回の旅行が通常の観光旅行と違いスコットランドらしさを体験できたからである。

まず第一に大学訪問にあたりグラスゴー在住で知人のスターリング大学モラン日本語教授と同大講師千穂子夫妻がお世話をしてくれたことである。夫妻のおかげでグラスゴー大学職員による愛橘に関する資料の準備と説明を受け、その後愛橘が学んだ教室の教壇に立ちみんなで一席ぶつなどの余興を楽しみ、その後ケルビン卿の小道を歩いたことも忘れがたい。また愛橘はすでにグラ

スゴー大の出席名簿に AIKITU と 日本式のローマ字表記していたことも意外であった。詳細は丹野幸男会長の「田中館愛橘の足跡を訪ねたスコットランドの旅〈1997年8月24日～9月6日〉」(田中館愛橘会 会報 特集号



110年前に愛橘が学んだ教室の教壇に参加者それぞれが立ち一席ぶつ

平成10年2月1日)に譲る。

第二に今回の宿泊場所として知人で英会話スクールの講師ロバートの紹介でエジンバラ郊外の寄宿舎付きハイスクール「LORETTO」の学生寮を夏休み中に1週間ほど朝食付きで借りることができたことであった。英国では日本の中高生に当たる上流階級の子弟が早くから親元を離れ寄宿舎付きの学校でエリート教育されている。その環境と設備の良さ、また食事の美味しいことを知ったことは英国への食の偏見をなくす意味でも良かった。

第三にこれもロバートの紹介でゴルフの歴史や現状が体験できたことである。ゴルフの歴史は古く15世紀後半にはゴルフ禁止令が出ているくらいである。グラスゴー近郊のプレストウィックではすでに明治維新より前の1860年に全英オープン大会が開催されている。今回の滞在ではその当時、エジンバラ郊外マッセルバラにある競馬場と兼用で作られたゴルフコースで地元の愛好会とプレイし親睦を深め、昔の道具や服装に直に触れた。翌朝同じ頃できたゴルフの聖地セントアンドリュース(全英オープンの数々の名勝負で有名)でもプレイできた。英国のゴルフはパブリック(共有地)で始まっているのでプレイヤーは散歩者がコースを横切るのを待つこと、リンクス(海岸)を強い風の中、膝まであるブッシュ(藪)、蛸壺と呼ばれるバンカーに苦労しながら自分でバックを担いで歩くなど日本のゴルフとはかなり違うタフでハードな経験をした。(余談:英国のゴルフ場は自然、米国は公園そして日本は箱庭)

第四に夏の観光シーズンにスコットランドに世界中から旅行者が集まってくる理由を実感したことである。移民の子孫がルーツを訪ねて、ウィスキーファンが蒸留所巡りに、あるいはトレッキングやフェスティバルそしてゴルフ、英会話のサマースクールも人気が出てヨーロッパ、アジアからも若者が集まるようになってきた。そんな街角の赤い郵便ポストやタータンチェックのキルトを巻きつけ直立でバグパイプを吹く男の曲も懐かしさに拍車をかける。今でも18世紀の詩人口バートバーンズ(1759-1796)作詞「蛍の光」原題はオールドラングサイン(遠き時代)が耳に残っている。日本人に懐かしいのは明治初期に招聘した音楽教師がスコットランド人で「故郷の空」などの民謡を文部省唱歌に採択し広まったからだと言われている。中でも最高の音楽的感動はスコットランド夏の最大のイベント「エジンバラ国際フェスティバル」の最終日に人気の「ファイヤーワークス(花火)コンサート」である。カラー照明で照らしたエジンバラ城を背景に花火と同時に曲調を合わせたスコティッシュ交響楽団による生のクラシック演奏を正面椅子席でスコッチを飲みながら堪能できたことは生涯忘れられない。(余談:日本では夜空の花火の美しさに感激、エジンバラでは城郭、照明、花火、音楽が一体化した芸術に感動する)

第五に過去に戻ったような既知的体験をしたことも心に残る。特に東北人はなぜかどこかで見たような風景と季節を感じる。初夏、遠くのなだらかな丘陵に黄色の菜の花畑が見え、その先に映画「嵐が丘」で見た薄紫色のヒースが広がっている。夏は短いが快適である。朝四時ごろから夜十時ごろまで明るく仕事を終えてから家事やスポーツをして食後パブに集まる。ただし中ジョッキのビールをつまみなしで30分ほどチビリチビリと話しながらやるのが彼ら流だ。彼らは通常ビールしか飲まない。(余談:英国政府は産業革命から学び度数の強いウィスキーやジンに高い酒税を課し国内消費を抑え労働者の二日酔い、ズル休み、アル中を防ぎ輸出で外貨を稼ぐという政策を採ってきた。因みに日本は日露戦争の戦費調達のため酒税を課した)

さらに質素というか素朴で派手嫌いの点も共感できる。英国では大邸宅でも普通の屋敷で

も新築より古い家ほど高い値で売れる。内部は自分好みのアンティークを使用したインテリアにする。もちろん庭も作るが中には自分でコツコツと10年以上もかけて石垣付きの小さなロッジのような家を作る人もいる。

普段の食事も同様に、毎日似たような料理を食べ、品数は少なく質素である。料理と言えばフランスやイタリアを挙げる人が多い。愛橘もまたフランス人のようにフランス料理は口当たりが良いと評している。歴史によれば当時、英国の上流階級はフランス料理らしきものを食べているが農民のほとんどは貧しい小作人たちで彼らにはポテトにヒツジの内蔵でもご馳走である。他方フランスは独立自営農が多く、自分で作り自分で加工し食事を楽しんできた。だからこそスコットランド人はアメリカへ移民し、産業革命の労働者になったとも言える。戦後の高度成長期の東北の出稼ぎ農民に似ている。(余談：英国料理は今でも話題が少ないが観光地で名物を急いで食べる団体旅行客にはうまいものは少ないはず。1992年EC加入後ワインやグルメ通の英国人が増加してきたと思う)

最後に結論的に言えば上述したように明治以来英国から社会制度、文化、芸術等様々な分野で影響を受け、知らず知らずにそれらが日本人の西洋的教養の深層に溶けていると思う。その上、東北に似たスコットランドの風土と歴史が一層私達に懐かしい気持ちを抱かせる要因になったような気がする。

秀吉と戦った政実を祖先に、賊軍として南部藩に育ち、大作流の武士道になじみ、しかもスコットランド訛りの英語を話す愛橘はイングランドに負けても今でも独立と伝統にこだわり質実剛健で頑固、貧乏を恥としないスコットランド人魂に、深い愛着を感じていたことは想像に難くない。私達も同じである。

愛橘は晩年時々、娘の美穂にスコットランドで求めた愛用のフルートでスコットランド民謡を吹き聞かせ留学時代を懐かしんだそうだ。

付記：今回の文章は学術論文ではないので読みやすさを考慮し、以下の主要な参考文献・資料のページは省略し内容も私流に要約した。

参考文献・資料

- ・W.W ロックウッド「日本経済近代化の100年」1966
- ・「時は移る」1988 原題：TOKIWAUTURU1948
- ・岩手日報社「岩手の先人」1987
- ・中村清二「田中館愛橘先生」1988
- ・J.K ガルブレイス「経済学の歴史」1989
- ・S. メネル「食卓の歴史」1989
- ・林望「イギリスはおいしい」1991
- ・D.Macrone「Understanding Scotland」1992
- ・司馬遼太郎「この国のかたち二」1992
- ・土屋守「スコットランド旅の物語」2000
- ・旅名人ブックス「セントアンドリュース物語」2001
- ・同シリーズ「スコットランド」2003
- ・渋谷栄一「論語と算盤」2010
- ・竹鶴政孝「ウイスキーと私」2014
- ・田中館愛橘会 会報 特集号 1998
- ・同会資料調査委員会第2回報告書 2016



ゴルフの聖地セントアンドリュースでプレーを楽しむ参加者

Tanakadate-Aikitu 先生のローマ字

1 ローマ字運動への思い入れ

Tanakadate-Aikitu 先生（以下 T 先生）が1920年に著された“Japanese Writing and Romazi Movement”の中で、斎藤博さん（後の駐米大使）が一つ逸話を紹介しています。

第一次世界大戦（1914～1918）の末期、国際学術研究会議に出席のためヨーロッパに出張された時のことです。万一の不幸の際、相当の弔慰金が支払われるとのことに対して、帝国学士院の会長に感謝するとともに、「これを家族への弔慰金としてではなく、財団法人日本のローマ字社への寄付として欲しい」、ということばを残されたとのことです。ローマ字運動に対する T 先生の思い入れは並大抵のことではなかったのです。



2 T 先生のご葬儀の弔辞

ご葬儀の弔辞を集めた『田中館愛橘博士没後 50 年記念・追悼文集』の中に、ローマ字文が二つあります。不本意ながら、漢字かな文に直してみます。

ローマ字運動の父としての

田中館先生のみ前に

ローマ字運動の生みの親である田中館愛橘先生を偲びまつり、私どもは今先生に呼びかけたい気持ちでいっぱいです。

先生は少年時代に、もののふの道や国学、漢学の修業を積まれ、青年時代にはヨーロッパ文化の教養を得られました。この東と西の二つの世界の溶けあったところから先生のローマ字国字論が生まれました。これは決して抽象的なものではなく、まず日本のローマ字つづり方の進むべき方針を示したものでありました。世界の学会はそののち 30 年もかかってやっとその独創的な方針にたどり着いたのであります。

先生は次に、ローマ字を国民に教えるための道を切り開かれました。それは、芳賀矢一先生、田丸卓郎先生とともに書かれた『ローマ字独り稽古』『ローマ字読み方』の二冊の本となって現れました。40 年も前から、入門書の広まり方を見守られ、また専門の書物を用意するために、田丸先生と力を合わせてお働きくださいました。これで、今日、ローマ字が広がりやすくなったのであります。

先生は、象牙の塔に立てこもることなく、広く全国民にローマ字の問題を呼びかけられました。先生はまた、ローマ字の仲間に対しては、職業、年齢、学歴を問わず、深い愛情と期待をかけておられました。

先生の三つのお仕事の中で、一番振るわないのがローマ字だとはよく言われるところであり、けれども、太平洋戦争に敗れたのちの様子は、たいそう変わり、いたるところに先生の志をつぐものが立ち上がってきました。この人々によって国語教育に新しい道が開かれ、

ローマ字は国民の生活の中へ溶け込み始めました。

そして、先生がお亡くなりになる前のひと月余りの間に、学士院と地球物理の集まりを除いては、ローマ字の事務所だけをおたずねいただき、先生に多少ご安心願えるところまでこぎつけたのであります。

私どもが先生の志を継ぐ上に、忘れられないことは、先生の汚れを知らぬ魂と、その生活態度であります。私どもは先生の独創的な考え方に教えられ、先生の強い意志にならい、先生のように広く文化全体の立場からことばと文字の問題を考えるまなこを持ち、この先生の教えを土台として、今日、今から、荒波に向かって新しい歩み続ける覚悟でございます。先生、いつまでも私どもの歩みをお守りください。

1952年5月26日

大塚明郎

大塚明郎(Haruo)先生は、T先生が1909年に田丸卓郎先生、芳賀矢一先生とでつくられた『財団法人日本ローマ字社』の理事長です。敗戦まで京城帝国大学文理学部長、当時は成城大学理学部長、のち東京教育大学教授です。物理教育学会を作った方でもあります。

もうひとつ

おくやみのことば

謹んで先生のみたまの前にわれわれのことばをささげます。

私どもの頭では、先生はとこしえに生きておいでになるお方、末永く私どものローマ字運動を見守って下さるお方として、それが当たり前のことのように考えておりました。ところが、このたび図らずも先生の御霊がお立ち去りになったということは私どもにとって、ちょうど地面が崩れてしまったような、何ともいえない気持ちが致すのでございます。

こういう悲しい気持ちはいくらこれを繰り返しても尽きないことであります。そして先生のお残しになったお仕事のうち、ただ一つ未完成で残っているローマ字運動は先生のみたまの為にも、これからますます盛んにならなくてはならないのであります。

そこで、私どもはここにいたずらに悲しみを繰り返すことをやめ、なかまのみなみなで心をそろえていっそうローマ字運動に尽くすことを謹んで先生のみたまの前にお誓い申し上げる次第でございます。

1952年6月8日

社団法人日本ローマ字会理事長

田村敏雄

日本ローマ字会は、ローマ字社が発行する月刊誌『ローマ字世界』の購読者が集まって1921年にできた「日本式ローマ字を国字にする目的をもった団体」で、T先生が長年会長をされていた社団法人です。田村敏雄先生は、池田勇人総理大臣とともに宏池会を作って事務局長として『所得倍増論』を完成した方です。『小林英夫：田村敏雄伝』（教育評論社）という伝記があります。

T先生は、最後まで日本ローマ字会の名誉会長として、ローマ字運動の先頭に立っておられました。この二つの文章が後につづく私どもの正直な気持ちでした。

T先生のひまご、松浦明先生が後に日本のローマ字社の理事長になりました。わたしも、お手伝いさせていただきました。2003年に、松浦先生とご一緒に『はじめてのローマ字の本(全3巻)』(汐文社)を作ったことがあります。時代も変わり、社会状況も大きく変化したので、新しい発想のローマ字学習の入門書をつくろう、と努めました。やっと完成して、『はじめての音素法ローマ字学習の本』を唱えておりました。ところが、1909年にできていた『ローマ字独り稽古』は「音素」という言葉こそ使っていないものの完璧な音素法ローマ字学習そのものでありました。T先生が100年も前に書き残しておられたものの焼き直しに過ぎないものでした。

3 ローマ字議員と呼ばれたT先生

日本語のローマ字化を目指す運動団体『羅馬字會』が、1885/01/17(明治18)にできました。このころの活動がT先生の著書“TOKI wa UTURU”に書かれていますが、この年に、『羅馬字用法意見』を発表され、それから「日本のローマ字社」を創られているのですから、これからのローマ字運動の活動の場は、「日本のローマ字社」、「日本ローマ字会」や大学、学会が中心でした。

T先生が、ひろく一般社会にローマ字運動家として知らない者がいないほどに知られたのは、貴族院議員としての活動によるところが多いことでしょう。1925年(大正14)貴族院議員となられ、戦後1947/03(昭和22)に貴族院が廃止されるまでの議会での活動はきわめて活発なものでした。帝国学士院からの勅選議員は文系、理系2人ずつですが、貴族院のあった期間では延べ9人ほどです。T先生の本会議での質疑は50回で、次に多い方は藤沢利喜太郎先生(数学)、三上参次先生(法学)が共に8回ですから、T先生の活躍がとびぬけて活発であったことが分かります。

T先生の議会活動は1926/02/05(大正15)の第51回帝国議会からです。その内容は、この日の質疑で述べられたように

1. メートル法の問題。
2. 航空機の問題。
3. 国語問題。

が中心でした。が、後に

4. 地震関係。

も加わります。

1のメートル法、2航空機の研究・開発、4地震の研究などは、ほぼ完全に一般に理解され、受け入れられてきましたが、3の国語問題だけが最後まで残された大問題でありました。T先生が、最後まで私たちの先頭に立って努力されていたのは、この国語問題、すなわちローマ字問題でした。

最後の貴族院の議事速記録(1947/03/21第92回帝国議会)を送っていただいて、繰り返し繰り返し読んだ記憶があります。

ローマ字に教育に関する質問主意書

一 今月4日発刊のローマ字運動ニュースに由れば衆議院の有力なる議員数名は決議案を提出して文部省案のローマ字教育を阻止せしめんとしつゝ、あるに顧みて、文部省は学校にローマ字教育の通牒を差控へ居ると云ふ。之は果たして事実なりや。

二 ヘボン式ローマ字綴り方主張者中に日本式綴り方を公用より一掃せんとするものあり。若し之が実現せば、日本国憲法第九十八条第二項に抵触する処なきか。

備考 昭和三年より同五年に至る万国船舶信号改定会議に於て日本地名綴り方は日本式を採用する事に決定せり。

右議員法第四十八条により質問に及び候也。

昭和二十二年三月十一日

提出者 田中館愛橘

(賛成者として31名の名前が記されています。)

これをもって、T先生は登壇され、議員のみなさんに学問的根拠をも詳しく説明されたのです。質疑という形をとっていますが、徹底した準備を整えた大演説です。

その前の登壇は、1946/06/23(昭和21)の第90回帝国議会でした。

(帝国議会・貴族院議事速記録から)

〔田中館愛橘君登壇〕

○田中館愛橘君 国語国字の整理に付きまして質問致します。総理大臣のお示しになりましたごとくこの世界大改革の時期にあたりまして、国民教育の刷新ということは最も大切な問題と存じます。さて、教育の基礎工事は何にあるかと申しますれば、やはり言語文字にあることと存じます。……(文字は)もちろん、便宜上使用の道具には過ぎませぬが、これを磨くことは大切なことと思います。

質問の趣旨を大体申し上げますれば、

第一、政府は将来国字を「ローマ」字にするという方針を明らかにし、これを広く内外にお示しになるお考えはありませぬか。

第二は、国語の綴り方は昭和12年内閣訓令に示されました現行の音素主義に依るべきものと思うが、これはどうであるか。

第三には、国民学校の初級に「ローマ」字を教えるお考えはないか。

この三点を伺います

……まずこの第一の「ローマ」字の問題は、ひとり日本のみならず世界の問題であります……大国の民国、「ロシヤ」、「バルカン」半島、「トルコ」等の諸国がいずれも国字改良について相当の苦心を払ったのであります。只今この成功を収めたところは「ロシヤ」と「トルコ」であります。「トルコ」は、私は1930年に参りまして、政府に頼んでその委員と会いまして、親しく改革の状況を聞きましたが、なかなか困難を経まして改革したのであります。而してこの1930年の1月より法律で旧来の文字を捨てて「ローマ」字を採用することを励行することになったのであります。それ迄は非常な議論がありまして、とてもこれは5、6年掛からなくてはできまい、ということを行いました。そのときに、「ギヤジ」という熱心家がありまして、「ただの6か月でできる」とこういうことを申しました。

……皆それを信じなかったのでありますが、結局6か月余りで、7・8か月にして多数が

「ローマ」字を実行することができました。国民が非常に熱心をもってこれに向かったのであります。……

……同じようなことを「ロシヤ」の「レニン」が申ししております。「ロシヤ」は50余りの違った国語を使い、違った文字を使って居ったのでありますが、この文字を統一しなければならぬということから、各部局に委員を設けまして、その委員長の会議を開いたのであります。その時に「レニン」の申しました終わりの言葉は、「「ローマ」字化、これ東洋の大革命である」こういうことを申ししております。この方針をもって進み、今日「ロシヤ」の文化は全く一変しております。……

わが隣国の民国は、すなわち昭和12年のシナ事変の起こった年の7月から、断然「ローマ」字を使用する準備をしたくらいであります。これは日露戦争後からの運動の結果でありまして、蒋介石政府は既に活版等を準備して、公の書類を皆「ローマ」字にしようとしたのであります。以上をもちましてこの世界の大勢は「ローマ」字を国語に取り入れて同化することに向かって居ることはお分かりと思いますが、この時世に乗じてわが国においても将来の国字は「ローマ」字にする、こういう方針を政府がお立てになりまして、着々とこれに向かって進むことを、私は希望しております。……

こんな調子で、第二、第三の質問についても、長時間にわたって熱心に、ある時は学生に対する講義のように丁寧に、また、力のこもった演説をされたのです。

答弁は、吉田茂総理大臣と田中耕太郎文部大臣からありましたが、第2と第3の質問に対しては、文部大臣から十分満足のゆく答弁を受けております。

このように、69歳から90歳の貴族院の廃止されるまで、努力を続けておられました。

4 ローマ字論の原理

T先生はたくさんのローマ字に関する文章を残されておりますが、『理学協会雑誌を羅馬字にて発兌するの發議及び羅馬字用法意見』（理学協会雑誌第16巻 p.105～132、1885）が特に有名です。これを書かれたときの様子は、“TOKI wa UTURU”の214ページ以降に書かれています。

1885年にできた『羅馬字会』で、どのようなローマ字つづりを使うか、という問題が議論されT先生が日本式ローマ字の立場から根拠をまとめられたものです。このため、この論文は日本式ローマ字の原点として紹介されることがあります。

先生の論文はとても優れたものですが、なにぶんにも一世紀以上も前に書かれたもので、時代背景や社会状況、学問的な背景もまったく違います。私も、ローマ字についての文章を發表することがあり、現代的なまったく新しい発想の文章を目指して書いてきました。ところが、いつもこれはどなたかの文章に書かれていたな、と感ずることばかりでした。それが、この『用法意見』です。

もう一つ、長年の間、「ローマ字運動のバイブル」として我々の運動の中心に置かれていた田丸卓郎先生の『ローマ字国字論』、『ローマ字文の研究』の二冊も、その原点はこの『用法意見』にあることが分かります。つづいて發表された『發音考』（理学協会雑誌第17巻 p.169～221、1885）は、日本語と外国語の發音の違いを説明するために書かれたものですが、この2編の論文でローマ字論については完璧に完成されたものとみています。

この論文は、1885年の發表で、現在の形の『音韻論』も『音声学』もなかった時代のもの

ですが、『音素』という言葉を使わずに、その中身（意味）を完璧なまでに使っているのです。また、『は発音考』には

1. 音を発する道具並びに其の発し方
2. 音の性質
母音、母音の組合わせ
母音と子音との境目、子音
3. 音を伝える中立（メヂウム）
4. 近所の有様
5. 音便のわけ、並びに書き方のこと
6. 発音の取り調べ方

などとなっています。当時、音声を調べるには、口、耳と共鳴器くらいしかなかった時代に、未来の音声の実験装置の考案をも示されているのです。

未来を先取りした文章は何処から来ているのでしょうか？これは、「大づかみにみて、力学の最小作用の道行きにしたがって進む」（最小作用の原理、TOKI wa UTURU p.256）という原理によるようです。変化する現象を考えると、①物事の本質を分解し、②「作用」に対応する量を見つけ、③それが極少になる。これが先生の考え方の一つであろうと感じています。物事の変化を一本調子の変化と捉えるのではなくて、「変化の原理」として捉えておられると感じています。この「ローマ字の原理」によった論文であるために、100年以上の将来に通用する「ローマ字国字論」が出来上がったものと感じています。

5 あとがき

T先生とローマ字との関係は、切っても切れない関係にあり、あえて『T先生《の》ローマ字』としました。ローマ字は、先生の内部にあるものだからです。

かな・ローマ字対応表

[illegible]

田中館博士の肖像

目 時 孟

昭和9年生まれ
元(株)北海道拓殖銀行・(株)岩手開発
石切所出身 紫波町在住

私は少年時代田中館博士の訾訾に接する機会がなく、人に語りうる思い出を持合せないのが残念である。博士に関する情報は父からの情報が専らだった。昭和20年8月の敗戦前後、博士は吞香稲荷神社の近隣に疎開しておられた。父は稲荷神社の宮司小保内樺之介氏（愛称カバさん）との誼^{よしみ}のおかげで博士の大的崇拝者だった。

強いて私の博士にまつわる思い出をあげれば、次の二冊の本の思い出だ。

その(1)『田中館愛橘先生』中村清二著

昭和21年4月5日 3版

発行所鳳文書林 定価8円50銭

この本は昭和21年12月、私が石切所小学校六年生のとき、父からお小遣いをもらい、福岡町の相馬書店で自分で買い求めたものだ。読めるかどうかの分別は全くなく、ただ「欲しい」の一念による衝動買いそのものだった。本の裏扉に覚えてたのたどたどしいローマ字（同級生の小野寺久夫君に放課後に教わった）で Hukuoka Sōmahonten nite motomu S̄ōwa 21nen 12gatu と記入がある。

その(2)『時は移る』田中館愛橘著

昭和23年8月25日発行

鳳文書林 定価2百円

この本も発行されて間もない頃、新制の石切所中学校二年生のとき、福岡町まで遠出して相馬書店で買い求めたと記憶している。

私は職の都合で二戸、札幌、函館、盛岡、紫波町と転々したが、二冊の本は幸い紛失することなく今も手元に置いてある。

『時は移る』をそっと開いてみよう。

老いぬれば

ゆくとしなみも

はやかわの

流るるごとく

なりにけるかな

冒頭に掲げられた博士の歌である。この本を手にしてから早くも4分の3世紀もの時が流れた。博士の歌の心がしみじみと伝わってくるこの頃である。

かれこれ10年ほど前だったか、有名な「田中館博士の肖像」が行方不明だという噂を耳にした。それと同じ頃、私の家内の友人佐々木倅子さん（昭和31福高卒 一戸町在住）から「信濃町の慶応病院の近くの画廊に展示されていたのを見たことがある。」という情報をいただき、

その画廊というのは神宮外苑の絵画館（聖徳記念絵画館）かも知れない、と見当をつけた。

偶々盛岡市内の書店で中村^{つね}彝の画集が目につき、手にとって開いてみたら「田中館博士の肖像」ものっており、東京国立近代美術館に収蔵されていることがわかった。とびあがるほど嬉しかった。早速その旨を夫妻揃って美術館巡りに長けた友人（皆川武蔵氏 昭和28福高卒 盛岡市好摩在住）に伝えたと、間をおかず奥さんが近代美術館に足を運び質ねた。学芸員が親切に対応してくれ、「常設展示をしていないが、特別に見せてあげましょう。」と実物を収蔵庫から特別室へ運び出して見せてくれたそうである。奇譚な話だ。

画集に話を戻そう。それは次の画集だ。

『中村^{つね}彝』新潮日本美術文庫 37

平成25年8月5日 2刷 である。

作品の制作過程を生々しく語っているのがめずらしいので、少々長いが引用させていただく。

「15 田中館博士の肖像 解説者原田光

1916年（大正5）

カンヴァス 油彩 72.5 × 60.5cm

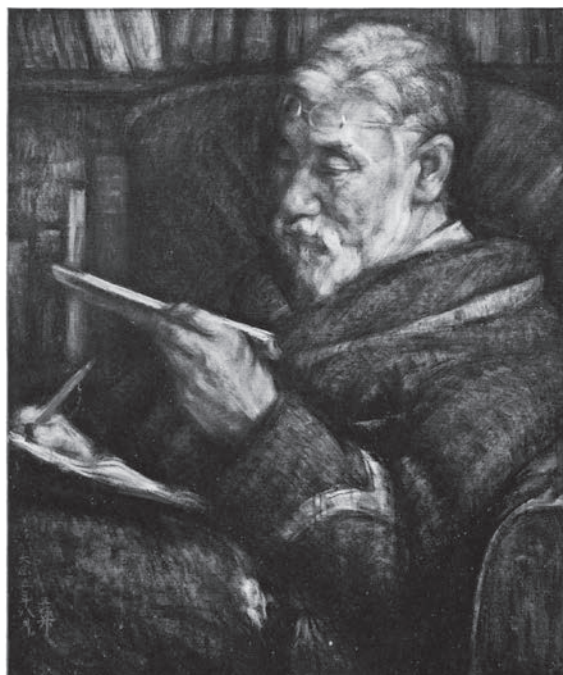
物理学者田中館^{たなかだてあいきつ}愛橘博士の東京帝国大学在職25年を祝って、博士に肖像画が贈られることになり、その制作を頼まれた。屋敷にかよい、1カ月ほどかけて完成させた。

せわしないモデルだったらしく、少しもじっとしていてくれない。かてて加えて、しじゅう誰かが訪ねてくる。てこずり、とまどい、氣勢をそがれて、これにはほとほとくたびれた。そんなわけで、彝には不満ののこった仕事と思えたが、さにあらず、いかに彝が肖像画にたけた画家であるか、証明する絵になったのである。（中略）

薄塗りのルノアールは、もはや完全に彝の表現法で、ほんの一筆がとらえる表情の変化は、その人の性格までつかまえている。

人物表現はルノアール風だが、人間理解はレンブラントに迫り、二つあわせて、彝が彝になりきった作品である。第10回文展に出し、特選を得た。」

（2021年7月記）



博士の肖像画

忘れ得ぬお言葉

皆川 武蔵

昭和8年生まれ
元花巻中学校校長
九戸村出身 盛岡市好摩在住

昭和26年10月4日、福岡高校講堂の壇上に立たれた田中館愛橘博士の全校生徒に向けての第一声は、

「朝鮮で、ドンパチが始まりましたなあ。」

でありました。

長閑で、静かなお声ではありましたが、その厳しい表情は、

「あれから5年、なんで戦なんだ。」と述べておられると思ったものでした。前年、勃発した朝鮮動乱を指しての事です。そして、その後に続くお言葉は、昭27年4月赴任の福岡高校校長、山口善次先生の博士の御霊前に捧げられた弔辞から抜粋いたします。

「顧みますと、昨年10月4日。本校講堂における1時間有余の御講演が、私達に対する先生の最後の御言葉になりました。その御講演の冒頭において先生が、『将来の日本を担うべき若い皆さんの前に立ちますと、日本を今日の悲運に導いた責任をひしひしと老いたこの身に感じます。

皆さん誠に申しわけありません。』

と、白髪のをさげられた時、私達は先生の科学者としての御潔白な御心に打たれますと共に偉大なる教育家の真面目に接して、深い感激を覚えずにはおられませんでした。」

山口校長は、田中館博士御講演開催の次年度赴任、弔辞は校内に残る正確な記録に基づくもの。70年の歳月を経て、尚、博士のお姿、お言葉が、あの日のまま蘇って来る弔辞であります。

そして又、以後、博士のように、若い人達に頭をさげ、真実を公的な場で語る方に出会う事はありませんでした。

福岡高校に於ける御講演の翌年、田中館博士は御亡くなられ、東大に於ける学士院葬を経て、福岡町名誉町民であられる博士の町葬が、福岡中学校々庭で行われました。

私は、たまたま下宿に帰る小道を歩いていて気付き、参列者の最後尾の草むらに腰を下し、県内外の著名な方々の弔辞奉読を拝聴できました。

今までも記憶にあるのは、哲学者、旧制一高校長であられた天野貞祐文部大臣のお名が呼ばれた事です。代読で東大理学部々長先生が読まれました。

本年（令和3年）同級生より貴重な冊子「田中館博士没後50年記念追悼文集」（編集発行：平成14年、記念事業開催実行委員会 非売品）を読ませて頂き、記憶が戻りました。

東大理学部の部長先生は、後に東大学長に就かれる茅誠司先生でありました。

茅教授は、東京の日本学士院葬に御参列後理学部教授の方々と共に福岡町までお送り下さったのだと思いました。

町葬後、夜「博士を語る夕べ」が公会堂で開催されました。そこに登壇された先生方は、東大理学部の教授の方々。

最初は茅教授のお話。自己紹介で、

「私の恩師は寺田寅彦先生です。寺田寅彦先生の恩師は、田中館先生ですから、私は、田中

館先生の孫弟子にあたります。」と述べられました。

東大理学部の熱い結び付をひしひしと感じました。

次に登壇された教授は、永田武教授。数年後、南極大陸第一次越冬隊々長を務められました。そのお話は、博士の研究・学会でのエピソードから、ご自身が博士に叱られた事などまで、明るく語られました。

公会堂内は、ほのぼのとした空気に包まれて行くのを感じました。

終了後、下宿に帰る夜の街路、外灯は、未だまばら。だが、足駄を響かせ、感激一杯で帰宅した記憶は今もあります。

天野貞祐文部大臣は、日本学士院葬の弔辞の中で

「先生の高い学識と円満は御人格とに裏づけられた烈々たる科学精神は、先生が、わが国の産んだ代表的人間像として一世の景仰の的となり世界の尊敬を集められ……」

と述べられております。これは、博士に直接、間接、接することが出来た方々なら誰しも首肯するところ。加えて、私は

田中館博士は、お亡くなりになる6ヶ月前福岡高校全生徒に、武士道の心髓を、清廉なる生き方を、如実にお示し下さったのだ。と今は、思っております。

「愛橘会の活動支援チャリティ」寄付をご寄贈いただきました！

令和3年2月5日～7日 二戸市民文化会館・展示室に於いて〈富田喜平司・上野東雲「2人展」〉が開催され、多くの市民の目を楽しませていただきました。

その折に、お二人のはがき作品（絵・書）を「田中館愛橘会活動支援チャリティ」として販売され、売上金4万円を田中館愛橘会にご寄贈いただきました。

富田喜平司先生は長年中学・高校の美術指導等に当たるとともに、モダンアートの作品等、多くの展示会等で入賞されていますが、87歳の現在も創作活動に燃え、毎年のように個展等開催されています。

上野光久（東雲）先生は長年に亘り高等学校に勤務され、書家としても大変活躍されています。また、教え子の指導にも熱心に取り組まれており、現在は一戸高校の校長先生をされています。

富田先生には愛橘会の活動にもいろいろご支援を頂いておりますが、今回お寄せ頂いた寄付金は愛橘会の活動基金として今後の活動に有効に活用させていただきます。

お二人の益々のご活躍を念じながら御礼を申し上げます。

令和3年2月12日

田中館愛橘会 工 藤 武 三

銅像周辺

二戸ロータリークラブ（田中館愛橘会協賛）による田中館愛橘博士像前の憩いの場づくり事業が完成しました。

銅像周辺を訪れた皆さんがより一層博士を身近な存在として親しんでいただけるよう、憩いの場として環境整備を進めていました。

皆さんも是非博士に会いに訪れて見てください。

再 開**「田中館愛橘博士を学ぶ勉強会」のご案内**

中断しておりました、次世代に田中館愛橘博士の功績と足跡を語り継ぐ勉強会を講師の菅原孝平先生の体調が回復致しましたので再開することになりました。

一般公開致しますのでお知り合いの方をお誘いの上、是非ご参加くださいますようお願い申し上げます。

記

講 師……菅原孝平氏（当会副会長）

日 時……第2回 令和4年2月16日（水曜日）

第3回 令和4年3月16日（水曜日）

第4回 令和4年4月13日（水曜日）

いずれも14時から（1時間半程度）

場 所……二戸市シビックセンター大ホール

（二戸市石切所字荷渡 6-2 電話 0195-25-5411）

編集後記

例年、博士の命日である5月21日に総会を開催し博士を忍んでおりましたが、新型コロナウイルス感染予防のため昨年に続き今年度の総会も紙上総会とさせていただきました。ここ2年間は皆様と一堂に会し博士を偲ぶことも叶わず、寂しい状態となっております。次年度は皆様一堂に会し開催できることを願っております。

今年度の会報は前回の寄稿者西村美代子様のご紹介で日時孟様、皆川武蔵様からご寄稿いただきました。そして、二戸市出身で上智大学名誉教授田中利見先生には当時のヨーロッパの事情であるとか、平成9年の二戸法人会によるグラスゴー訪問記等を書いていただきました。

また、ローマ字の大家清水正之先生は、愛橘博士から直接指導いただいた最後の世代になるでしょうか、ローマ字普及について貴重なご寄稿をいただきました。清水先生からはローマ字原稿での寄稿の申し入れがありましたが、あえて漢字、かな文字でお願い申し上げました。

なお、紙面の都合上割愛させていただきましたが、児童生徒科学研究発表会とローマ字書道コンクールは協賛して開催されております。

今回は各方面からのご協力により内容の濃い紙面にさせていただき、改めて御礼申し上げます。

愛橘会も世代交代が進み、博士の調査研究活動、会報等毎回どのような内容にしたらいかが情報収集に悩んでおります。皆様からの情報提供およびご寄稿のご協力をお願い申し上げます。